第13課　クリスチャンの生き方

【暗唱聖句】

「それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」ローマ14:10

【今週のテーマ】

信仰の強い人と弱い人がいます。食べ物のことや日のことなど、日常生活の中でそれはしばしば表面化されます。

そのようなとき、どのようにそれらを理解し、対処すべきかを学びます。

【日曜日・信仰が弱い】

「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです」ローマ14:1～3

食べ物の問題は初代教会の時代が常にありました。ここでの問題は健康と食事の問題ではなく、信仰と食事の問題であることに注目しなければなりません。多くのユダヤ人クリスチャンにとっては偶像に捧げられた肉を食べることは、自らの体も汚れてしまうのではないかと無意識のうちにも恐れていました。しかし、市場で売られている肉が偶像に捧げられたものかどうかを判断することが難しいために、少しでも疑いがあるのなら肉を食べないで野菜だけを食べることにしていたのです。しかし、そのようなことを全く気にしないで肉を食べているクリスチャンもいました。このことが互いを批判する原因となっていました。

　ところで、エルサレム会議が開かれたとき、異邦人クリスチャンが守るべきこととして、偶像に捧げられた肉を食べないようにということが決められました。これは肉が汚れているとかいないとかというよりも、異邦人クリスチャンとユダヤ人クリスチャンとが仲良く食事ができるようにとの配慮からでしたが、この決め事が徹底されていたわけではないようです。

　さて、この問題に対してパウロの考えは非常に興味深いものでした。まず野菜だけを食べる人を「信仰の弱い人」と表現しました。なぜなら、イエス・キリストが「聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである」（マタイ15:10，11）と言われ、食べ物で体が汚れることはないと教えられているにも関わらず不安に思っているからです。しかし、パウロはその信仰の弱い人に対して、その考えを批判してはいけない、あるいは軽蔑してはならないと言います。教会において弱い人のことを思いやるというのは常に第一優先課題なのであり、これは信仰の面においてもしかりなのです。

　これに対して「何を食べてもよいと信じている人」に対しては、信仰が強いとは言っていませんが、流れから言えばそういうことになるのでしょう。パウロは「食べない人は、食べる人を裁いてはなりません」と言います。結局のところ、互いの信仰を裁き合ってはならないということです。なぜなら、「神はこのような（信仰の強い人も弱い）人も受け入れられたからです」。ところでパウロは信仰が強い、弱いと言っていますが、どちらのほうがクリスチャンとして良い悪いとは言っていません。山をも動かすような強い信仰があっても、愛がなければ無に等しいのです。

「他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。」（ローマ14：4）

教会の中で誰かを裁くとするなら、まるでその人を自分の召し使いのように思っているとパウロは指摘します。牧師も教師も、教会の兄弟姉妹も、誰かの召し使いではありません。一人ひとりはみな、イエス・キリストの召し使いなのです。確かに、その召し使いが間違いを犯す時もあるでしょう。しかし、誰もその人を自分の召し使いのように裁いてはならないのです。なぜなら、その僕は主人であるイエス・キリストのものであり、裁くとすればイエス・キリストが裁かれるからです。しかし主なるイエス様がなさることは倒す事ではなく、私たち弱い者を強く立たせることなのです。

【月曜日・裁きの座の前】

「それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」ローマ14:10

兄弟を裁いてはならないと繰り返し教えられており、その明確な理由が明らかにされているにも関わらず、わたしたちが誰かを裁いたり、侮ったりするのなら、わたしたちは皆、いつの日か神の裁きのみ座の前に立たなければならないことを思い出す必要があります。そのときいったいどのように弁解することができるのでしょうか。

「こう書いてあります。「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、／すべての舌が神をほめたたえる』と。」それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです」ローマ14:11、12

「すべてのひざ」「すべての舌」という表現に、一人ひとりが神様の裁きの座にひざまづき、そこで一つひとつのことを弁明しなければならないことを表しています。もちろん、イエス様がわたしたちの弁護者となってとりなしてくださるので、この裁きの座に耐えることができるわけですが、本来はわたしたちが弁明すべきことがらなのだと思えば、わたしたちは兄弟の番人ではないし、人のことよりも、自分のことを心配すべきであることがわかるはずです。

「それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています。汚れたものだと思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです」ローマ14:14

食べ物で自らが汚れることなどありません。パウロは主イエスによってそのことを知り、確信していると言います。従って、特定の食べ物に関して汚れているのかいないのかと議論するならば、その答えはすでに出ています。しかし、パウロがポイントにしているのはそこではなく、弱い信仰を持った人に対する愛と配慮を持たなければならないことを強調しているのです。信仰が弱くて市場の肉が汚れていると思う人にとっては汚れているのです。それが信仰的ではないとか、科学的ではないと言ったところで、その人を励まし、強めることにはなりません。むしろ、その信仰の弱い人をつまづかせることがないように、暖かな配慮が必要なのだと主張しているのです。やがて、信仰の弱い人も少しずつ成長することでしょう。それを見守っていくべきなのです。

【火曜日・そしりの種にならないように】

何を食べるのか食べないのかは、一人ひとりの信仰によって異なり、それを互いに裁きあってはならないとパウロは教えてきました。しかし裁き合わないのであれば何を食べても自由なのかというと、パウロはそのようには考えていませんでした。

「あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません」ローマ14:15

何かを食べる、あるいは食べないことによって、それを見た誰かが心を痛めるならば、それはもはや愛に従って歩んではいないのだとパウロは言うのです。私たちにとって善いことであっても、それが「そしりの種」にならないようにしなければなりません。そもそも「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです」（ローマ14:17）。食べ物などどうでも良いというのではありませんが、もっと素晴らしい義と平和と喜びは、食べ物からではなく聖霊によって与えられるのです。だから、聖霊をもっと熱心に求めようではないかということです。聖霊が与えられれば、どのような行動が正しいのかも見えてくることでしょう。またわたしたちの心の問題、確信についてパウロは次のような大切な言葉を残しています。

「あなたは自分が抱いている確信を、神の御前で心の内に持っていなさい。自分の決心にやましさを感じない人は幸いです。疑いながら食べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基づいていないことは、すべて罪なのです」ローマ14:22、23

人をつまずかせないように気を付けながら食べる、食べないということをしたとしても、心の中では確信をもっていることが大切です。そしてその確信にやましさのない人は幸せです。しかし、信仰が弱く、疑いながら食べるとすれば食事も美味しくないでしょうし、確信に基づかない行動は罪に定められてしまいます。罪に定められるとは、それが悪い行いだというのではなく、神様不在の行動となってしまうということです。だから平安がなくなってしまうのです。

【水曜日・いろいろな日を守る】

「ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。14:6 特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです」ローマ14:5，6

食事の問題と同様に他者との関係においてトラブルになりやすいのが特定の日を守る、守らないという問題です。特定の日というと、安息日のことかと思ってしまうかもしれませんが、ここでいう特定の日とは安息日のことではありません。ガラテヤ4:10に「なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています」とあるように、初代教会で問題になっていたのは、創造主なる神様が定められたものとは関係のない、頼りにならない悪霊の影響のもとに信じられてきた日や時節などを守っているということに関してでした。日本でも、仏滅、友引にはお葬式や結婚式をしたがらない人が多いのと同じです。特定の日を重んじる人は、そうではない人を、また特定の日など気にしない人は、気にしている人を裁くことがないようにとパウロが言う論法は食事の問題と同じです。

【木曜日・最後の言葉】

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです」ローマ15:1～3

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきである」というパウロの言葉は、クリスチャンの生き方の基本となっています。弱い人が強い人の強さを担うことはできないからです。しかし今日強いと思っていた人でも、明日は弱さを露呈するかもしれません。強かったり、弱かったりを繰り返すのが人間です。だから、助けたり、助けられたりという関係が生まれるのです。これはとても大切で麗しいことではないでしょうか。

「忍耐と慰めの源である神」ローマ15:5

パウロは神様を忍耐と慰め（励まし）を与えてくださる方として描き、締めくくりの言葉を語っていきます。互いの弱さを担うためには、神様からの忍耐と励ましが必要です。

「この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです。その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました」ローマ16:25、26

福音は世々にわたって隠されてきた秘められた計画でした。だから、誤解や混乱があるのは仕方がないことです。しかし、今やその秘められた計画は明らかになり、正しく理解することができるようになったのです。